

研究発表要旨

プルタルコス「アリストイデス伝」におけるプラタイアの位置付け

酒嶋 恭平

本報告はプルタルコス「アリストイデス伝」で描かれるプラタイアの戦いの記述の中で、プラタイアの崇拝やプラタイア人の働きにかんする逸話が果たした意味を考察することを目的とする。

古代ギリシア史研究において現在最も多産な研究分野のひとつがギリシア人の記憶に関する研究である。この分野の主要な目的のひとつは、様々なメディアを通して個人や共同体がいかにして過去のイメージを利用して自らのアイデンティティを表明したのかを解明すること、そして近現代の研究者によりヘロドトス、トゥキュディデス、ポリュビオスといった特権的な歴史家たちの作品を通して形成された古代ギリシア史のマスター・ナラティブを相対化し、古代ギリシア史の叙述を再構成することである。この文脈で、ペルシア戦争の記憶に関する研究はここ 20 年間で最も研究の進んだトピックのひとつであり、D. C. Yates, 2019. *States of Memory: the Polis, Panhellenism, and the Persian War*. Oxford and New York や G. Proietti, 2021. *Prima di Erodoto: Aspetti della memoria delle Guerre persiane*. Stuttgart などの研究は、ペルシア戦争の記憶の変容や経験、記憶の多様性を解明してきた。本報告は、ローマ帝政期ギリシアの文脈から、こうした研究動向に貢献する試みである。

本報告の焦点は、プルタルコス「アリストイデス伝」におけるプラタイアとプラタイア人の表象である。この伝記は前 479 年のプラタイアの戦いにおけるアテナイの将軍が主人公であるために、全体の約 40%がプラタイアの戦いの記述に費やされている。その記述は、プラタイアのローカルな崇拝やプラタイア人の活躍を詳述している点で他に例がなく、注目に値する。プルタルコスはボイオティア出身で地元の伝統について熟知しており、これらの逸話はボイオティアあるいはプラタイアのローカルな声を反映したものと思われる。したがって、彼の伝記はローカルな文脈で受容された伝統や歴史物語を知る重要な手がかりになるとともに、この伝記がヘロドトスからどのように距離を置こうとしているのかを理解する試金石にもなる。では、プラタイアにまつわる逸話は、プラタイアの戦いにかんする彼の語りにもどの程度影響を与えているのだろうか。この問いに答えるために、プルタルコスの伝記からプラタイア人に関連する逸話、特に戦場の発見に関する 11 章 3-8 節と、ゼウス・エレウテリオスの崇拝設立に関してデルポイから浄化の火を運搬する 20 章 4-6 節の逸話を取り上げる。本報告の中心的な論点は、プラタイアとプラタイア人に決定的な重点を置く逸話を利用することによって、プルタルコスがプラタイアの戦いの語りを自らの求める形に再構成したということである。これは、彼が利用した史料と、ボイオティア人かつギリシア人エリートとしての人生を通して築き上げられた彼のアイデンティティを反映した史料操作に由来していると考えられる。

理性は〈原因〉の類にほぼ属する
——プラトン『フィレボス』28c6-31a4 解釈——

荻原 理

Phil. 28c6-31a4 でソクラテスが提示する議論の内実を解明したい。

議論の結論は何か。“人間の理性(nūs)は〈原因〉の類と同族でありこれにほぼ属する”であると発表者は解する。眼目は二つ。(1).結論の主語は、宇宙のではなく人間の理性だと解する。(2).結論の述語部分は“〈原因〉の類に属する”ではなく、“〈原因〉の類と同族でありこれにほぼ属する”であると解する。

(2)のように解するのは、結論は 30e1 で導かれ 31a7-8 で再度言われ、後者では紛れもなく「理性は〈原因〉と同族でありこの類にほぼ(schedon)属する」と言われるからである。31e1 で、B 写本は *genous tēs*、TW は *genoustēs* (造語)だ。30e1 は 31a7-8 と同内容のはずだから、B の読み(*physeōs* 等を補うのだらう)は採り難い。TW の読みで、‘*genoustēs* + 属格’を「〜と同族」といった意味に解してはどうか。

発表者が(1)のように解するのは、文脈上、問題の理性は、*Soc.*が快樂説との論争で打ち出している理性であるはずであり、それは宇宙ではなく人間の理性だからだ。

だが議論のほとんどは、宇宙が理性に支配されていると示すことに捧げられる。*Soc.*は“宇宙理性が(秩序ある運行の原因として)〈原因〉の類に属する”ことから、ある暗黙の前提を介して、“人間の理性は〈原因〉の類と同族でありこれにほぼ属する”と結論しているのだらう。暗黙の前提とは、“人間の理性は宇宙理性と同族である”だらう。

ではなぜ、宇宙理性は〈原因〉の類に留保抜きで属するが、人間の理性は留保付きでしか属さないのか。それは、人間の理性がなにかを生じさせるとしても、その成果は、宇宙理性が生じさせる秩序ある運行に較べれば取るに足らず、したがって人間の理性は「原因」の名に真には値しないからか。いな。生じるものはすべて原因によって生じるとされている(26e2-5)。

発表者はむしろこう提案する。“Xが〈原因〉の類に留保抜きで属するには、Xは機会ごとにつねに当の結果を引き起こさなければならない”と *Soc.*は前提している、と。この前提の下では、或るものが〈原因〉の類に属さないからといって、それがなにも原因にもなれないわけではない。或るものがたまたまなにかの原因になることもある。また、機会ごとに、つねにではないが多くの場合なにかを生み出すものもある。宇宙理性は年、季節、月をつねに生み出しており、ゆえに〈原因〉の類に属する。他方、人間の理性は多くの場合、その人の生を幸福にする。したがって〈原因〉の類と同族でありこれにほぼ属する。

本発表は上記の解釈を採りつつ当該議論を解釈していく。もう一つには、*Rudebusch* に従い、30a9-b8 では、“〈原因〉の類が——つまりこの類に属するあれこれが——動物に魂をもたらしており、身体訓練術や医術を人間の魂の内に生み出しており、年・季節・月を考案した”と言われていると解する。

ギムナシオンを通じたヘレニズム君主による恩恵施与慣行 ——事例としてのアッタロス朝と小アジアの諸都市——

波部 雄一郎

ヘレニズム時代において、君主が都市や神域に対し、資金の提供や建築物の建立などを行う恩恵施与慣行が一般化する。なかでも諸王による都市の体育・軍事訓練機関ギムナシオンの建設、またはそこで使用される油の購入費用提供などの支援の事例が、碑文史料から数多く確認されている。本報告では、アッタロス朝を事例として、同王朝による小アジアの諸都市のギムナシオンへの寄進行為について、政治史の観点から考察する。

従来、ヘレニズム諸王国の都市のギムナシオン支援は、諸王国の軍事力増強という目的によるものと考えられてきた。これは諸王が支援した都市のギムナシオンで市民を訓練し、それを諸王国の軍隊に編入するという前提にもとづく。現在ではこのような通説は否定され、むしろその理由を王権と都市との関係強化に求める傾向にある。多くの都市では、諸王への君主礼拝儀礼の一部をギムナシオンで行っていたが、君主礼拝とは都市が王に忠誠を確認する場であり、それゆえ諸王朝がギムナシオンを重視し、都市への理想的な恩恵施与の手段であった、という理解がその背景にある。

ヘレニズム諸王国によるギムナシオンへの恩恵施与の事例を確認すると、アッタロス朝のギムナシオン支援件数が、他の諸王国に比べ突出して多いことが確認できる。同王朝のギムナシオンへの支援は、君主礼拝を通し諸都市に王朝への忠誠を誓う場を確保する目的に加え、ギリシア文化保護政策の一環として理解されることが多い。歴代諸王のガラティア人に対する戦勝を記念する建築物や美術品が諸都市に建設、寄贈されたように、「ギリシア化」の象徴であるギムナシオンへの援助は、ギリシア人とその文化の保護者を自認するアッタロス家の重要なイメージ戦略であった。しかし、同王朝のギムナシオンへの援助は小アジアの同王朝の影響が及ぶ都市に限られ、さらに同王朝の支配圏が拡大したアパメイアの和約(紀元前 188 年)以降の時期にその件数が増加しており、同王朝が何らかの意図を持ってギムナシオンの支援を推進したと理解すべきである。

本報告では、碑文史料から、アッタロス朝によるギムナシオン支援の内容を考察するが、支援の内容のうち、ギムナシオンにおける油の購入費用提供が多く確認される点に注目する。こうした支援の最大の受益者はギムナシオンの利用者であるエフェボイや青年市民層ネオイであると想定できるだろう。近年の研究動向では、ネオイが都市の意思決定において一定の影響力を保持していたことが指摘されている。ヘレニズム時代の小アジア諸都市におけるネオイの動向を考察することにより、ギムナシオン支援を通じたアッタロス朝の都市政策にとどまらず、同王朝と関係を維持するようになった諸都市の政治的動向をも解明も目的とする。

前 5 世紀アテナイにおける *demos* と海軍をめぐる観念
——伝クセノフォン『アテナイ人の国制』を中心に——

岡田 泰介

古典期のアテナイにおいて、政治的平等と経済的不平等が共存していたことはよく知られている。社会は不労所得生活者である少数の「富裕者 (*plousioi*)」と勤労者であるその他の「貧民 (*penetes*)」とに分断されていたとされる。これら二つの階層そのものも均質ではなく、*penetes* は有産労働者と無産労働者からなっていたと考えられている。そして後者を、軍船乗組員を出した「下層市民」(およびソロンの等級の *thetes*) と同一視するのが、おおむね暗黙の了解になってきたように思われる。さらに、そうした認識を前提として、ペルシア戦争以降アテナイが海軍国として台頭したため「下層市民」の政治的発言力が強まった結果、完全民主政が実現し、彼らは民主政の岩盤支持者層になったと説かれることもある。

こうした仮説の最大の根拠の一つとなっているのが、クセノフンの名で伝わる小冊子『アテナイ人の国制』である。この作品が前 431～424 年ごろ「富裕者」層に属するアテナイ市民によって著されたとする通説に従うならば、著者は市民を *oligoi* (*plousioi*) と *demos* (*penetes*) に二分するとともに、当時の民主政を、海軍の主体としてポリスに軍事的に最も貢献する *demos* の利益を最大化するための政治体制と定義し、そのメカニズムを詳細に論じている。

著者は、海軍の主体と定義した *demos* について、*plousioi* と同一視される *georgountes*、*hoplitai* を除外する一方、*strategos* や *hipparchos* などの上級公職に就けた、国内外に財産や奴隷を所有する者がいた、とも述べる。すなわち、ここで著者は、*demos* を非農業的・非重装歩兵的な都市下層民として描こうとするが、論理的に破綻している。その原因は、*oligoi* 以外の多数派市民つまり *penetes* 全体が海軍を担うという観念が存在し、著者がその影響を受けていたからではないか。

市民団全体ではなく少数エリート以外の多数派市民を指す *demos* の用法は、反民主政的思想の産物とされることが多いが、用例はホメロスにさかのぼり、当初はネガティブな政治的ニュアンスはなかった。この意味での *demos* が海軍を担うという観念は、同時期の史料のなかでは、『国制』の著者と同じ *oligoi* の一員であるトゥキュディデスだけでなく、より広い市民層を対象としたアリストファネスの作品にも見ることができる。したがって、そうした観念は、事実かどうかは別として、当時、一種の社会的通念ともいえる性格を持っていたと考える。